
Yesか猫かカップ麺

神の息

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Yesか猫かカップ麺

【Nコード】

N7591D

【作者名】

神の息

【あらすじ】

16歳にして一人暮らしの男、木谷斗希久夫と、猫達（擬人化の面白おかしい日常を描いたラブコメですY。o

一匹：カップ麺には毒がある

俺の名は木谷斗^{キヤト} 希久夫^{キクオ}。

16歳にして、一人暮らし中である。

高校には行かずに、「何でも屋」なるものをしている。

何でも屋といっても、他人のお手伝いとかをする訳ではなく、何でも売っているのだ。

小さなものならポケットティッシュから、大きいものなら車まで。とはいってもなかなか売れる時期は無く、結構苦しい生活だ。

そして今日はスーパーに行つて、買い出し的なことをしていた。

今はその帰り道。 重いビニール袋を両手に持つて、やっと家^{みせ}に辿り着いた。

店^{いえ}に入ろうとドアノブに手を掛けると、

「ガサガサ、ごそごそ」

と何かをさぐる様な音が中から聞こえてきた。

「どーせまた野良猫でも入ってんだろ」

と溜め息まじりに言つて、中に入った。

「ガサガサ」

とビニール袋だらけの部屋の奥の方から音が聞こえる。

「猫さん猫さん、それは店の売りもんですからやめてくださいよ。」

「はいはい」

奥から返事が聞こえた。 まったく、これだから猫は・・・ってあれ？

「今しゃべつたよな・・・。」

あれえー。脳細胞へつてきてんのかなあ俺。猫がしゃべるわけネエだろ。

それとも幻聴？ なんて事ぶつぶつ言つてると、奥から人がでてきた。

え？なにになにこれ？泥棒かなんか？

にしては服装が変だった。牛柄の服着てフードかぶって、下はだぼだぼのパジャマみたいな

灰色のズボン。それと何より、女性。というより中学生くらいの女の子だった。

「こんにちは！えっと、希久夫キクオくんだっけ？私の名前はアルメ！えっと、何だろうねこの子は。いたい子だね。

「・・・とりあえず状況の説明を頼む。」

「えっとお、向こうの開いてた窓からここにはいつてえ、その後力ツプ麵の残り汁みたいの飲んでえ、そしたら人間になってたの！！こいつは相当だな。アタマ打ったんじゃねえのかこいつ。

まず、開いてる窓はすごく小さなもので、猫が一匹通るくらい。そしてカップ麵の残り汁を飲んだという理性の無さ。

極めつけは「人間になつてたの！！」だとさ。

「じゃあ何、お前は人間ではないと？」

「そだよー。私はアルメ！」

「名前じゃなくて、種類？的なこと！」

「猫だよ！」

「ぼあ？なに言ってるんですかこいつは。

「まあとりあえずそこに座って話を聞こう。」

警官っぽく言って、俺はその場に座り込んだ。

続くよーーーーー。

一匹：カップ麺には毒がある（後書き）

ホリケンサイズに憧れる男。

こんにちは、神の息です。読んでくれてありがとう1兆匹！！いたら困りますね。感想いただけると嬉しゅうございます。

二匹：久しぶりブリプロッ・何でも無い

「猫・・・ねえ・・・」

まったく有り得ない話をされて、俺の脳みそは訳分からなくなっていた。

「で、結局何食ったんだ？」

「だーからー、カップ麺！置いてあったの！」

カップ麺、か。いくら体に悪いとはいえ、猫が人間になる訳など・

「あつ！ー！！」

「にやつ？ー！！」

俺は思わず声を上げた。思い出した事があった。

「そういえば俺、カップ麺食ったあと、実験とか言って色んな物を汁にぶちこんだ覚えが・・・。」

「な、なにを入れたと言うのですか！」

幼い声で聞いてきた。少し間が開く。

「確かな、砂糖と塩と重曹と味の素と蜂蜜と黒蜜と胡椒を入れた。」

「・・・・・・・・・・。」

アルメの顔が青ざめていた。

「いい匂いーと思って飲んだのに・・・。猫としての自信を失くした・・・」

とは言っても俺から見れば人間にしか見えない。

「とにかくそんなに落ち込むなよ・・・な？」

そう言いながら俺はアルメの頭を撫でた。フードがスルリと脱げる。

「み、耳がついてる・・・。」

アルメの頭に付いていたのは紛れも無く猫の耳だった。

「あれー、驚いてるの？」

からかうように言ってきたので、少し得意げに、

「んな事ねえよ。」

と言った。顔は引きつっていたが。

「えー・・・と。で、お前はどつする気だ？野良猫さん。」

意地悪な質問に怒ったり、悩んだりする。のかと思いきや、

「ここに住む！」

と笑顔で即答してきた。

「いや・・・お前な？この部屋ん中みりゃわかるだろ？うちは金がないんだよ。」

「じゃあアルメがお金つくる！」

「いや、お金つくつたら犯罪だから。とりあえず家で飼うことなどできんな。」

「・・・」

アルメの目がウルウルしていた。実際の所、長い間独りだし、ひきとってやりたい。それに、俺も一人の男だ。女子と同居なんて夢のような事だ。だが、二人も暮らしていける程の金はない。迷う。迷う。

「だ、だ・・・め？」

「よかろう、飼ってやる。」

やっぱり誘惑には勝てやしない。人生なんてノリだ、ノリ。

「やったー、やったー！！」

無邪気に喜ぶアルメ。だが、俺には「頼み」があった。

「そのかわり、自分の食費等はしっかり稼ぐ事！という訳だから、しっかり働いてもらうぞ。」

「らじゃー！」

良い返事だ。とは言え、こいつにどんな仕事ができるというのか・・・。

「・・・にしてもこの残り汁すげーな。」

二匹：久しぶりぶりプロッ・・・何でも無い（後書き）

更新が遅れてしまい、本当に申し訳ありません！

でも、嬉しい事に、一話の読者数は凄く多かったです！読者の方、ありがとうございます。

三匹：三人寄れば文殊の知恵

「いざ、開・店！」

がらがらがらー、ピシャン！

朝の六時。まるで目覚ましのベルのような、うるさい音をたててシャッターが開く。

「ほら、起きろアルメ。仕事だ仕事！」

俺は嬉しそうに言った。初めて仕事仲間ができたのだから。

「ふあああゝ。（あくび） きークン、早くない？まだ六時だよ？」
アルメは目をぱちぱちさせながら眠たそうに言った。

「ここは学生も通る道だからな。早めに用意しねーと常連さんに失礼だからな。あと、きークンというあだ名は認めよう。」

『きークン』かぁ……。俺はあんまり仲の良くなった女子が居なかった。だが、一人だけ俺の事をあだ名で呼んでくれた人がいた。それは中学生の時。学校中でかわいいと人気のあった女子が居た。

偶然その人と同じクラス、隣の席になり、よく俺の方から話しかけた。するとその女の子も話してくれるようになり、あだ名を付けてくれた。それが『きークン』だった。その後も仲良くなり、いつしよに遊園地にも行ったりした。そこで俺は思った。告白したら成功するだろうと。そしてクラブも無い休みの日、俺はその人を公園に呼んだ。砂場の所で二人で遊んで、すぐに俺は告白した。「付き合ってくれ」と……。だがその人は、「お前なんか恋愛対象に入ってねえんだよっ！」と言いながらその場で俺にストーンコールドスタナーをくらわして、そのまま帰ってしまった。その日から俺はその人と話したことが無い。

「どうしたのきークン、悩み事？」

「あ、いや、別に。」

俺としたことが脱線しちまってたようだ。

「今から商品を並べるのだが、ここでアルメに問題だ。この時間帯

は何を並べたらいいと思う？」

「ざぶとん！」

「いや、なんでだよ。ヒントはなあ、学生が昼に食べたりする物。」

「納豆！」

「ちっがーう！パンだよパン！おにぎりとか！」

「あ、なるほど。」

なんだよこの馬鹿みてーな会話。そんな事してると、もう学生達
が通り始めていた。

その中の男子学生が店の方に来た。おれは急いでアルメを店の奥
に行かせる。

「希久夫さん、おっはー。今日もパン買いに来ましたー。」

「おう、おはよう。まだパン出してきてねーから、ちょっと待って
るよ。」

そう言つて俺は、アルメの方に向かった。

「よしアルメ、初仕事だぞ。まずそのパン並べて、その後接客。
あと、絶対フードは被つとけよ。」

「らじゃー！」

そう言つと、パンを持って並べに行つた。

「んじゃ、俺も運ぶか。」

とりあえずパンを持って、アルメの後に続いた。

「いらつしやいませー。新入りのアルメでーす。」

そんな事言いながらウインクしてやがる。なんか子供っぽいとい
うか・・・。

「あれ？希久夫さんバイトさせてるんすか？それとも彼女とか？」

「なんつーかなあ・・・拾つた。」

「拾つたつてどういう事つすかあ？なんか犯罪の臭いが・・・。」

「バカなこと言つてんじゃねーよ。」

こいつとの会話はいつもこんな感じのくだらない話だ。

「あ、やつべえ遅刻！今朝礼だった！スンマセン今日やつぱいい
です。それじゃー！」

「おお、いつてらー。」

「いつてらっしゃーい」

結局なんも売れなかったか。するとまた、お客さんが来た。女の人だ。

「すいません、このへんの地図って売ってますか？あんまりこの辺、分かんなくて。」

「あ、地図ならありますよ。えーと、１００円です。」

そんな普通のやりとりを、じーっとアルメがみていた。

「あ、おはようございます！アルメでっす！」

アルメの挨拶につこりとその人は笑った。

「あの、道が分かりにくいんでしたらお送り致しますよ。」

俺は何でも屋として、このお客さんは逃がせられなかった。なぜなら最近、なかなか客が来てなかったからだ。

「おやおやおやー。きークン、ありとあらゆるいやらしい事を考えてませんかー？」

「んな訳ねーだろうが。」

お客さんの前でまであんまりバカな話してられないんだが。

「あの、行きたい所分かんないんで、着いてきていただけますか？」

「あ、はいはい、えーと少々お待ちください。」

そう言つて、アルメを店の奥に連れて行った。

「アルメ、お前は店番をしてろ。今からの時間帯、あんまり人も来ないから大丈夫だろ。」

「えー。きークンが店に居とけばいいじゃん。」

「あのな、読者の皆様は知ってるんだがな、あの人ストーンコールドスタナーの人なんだよ。どうしても、頼む！」

「よく意味わかんないけど・・・、しょうがない。ここはアルメ様にお任せを！」

「すまん、恩に着る！」

そう言つてから俺はその人と町に出た。

30分・あ、32分ぐらい後

「ただいまー」

「だあああー！ー！！！！ちよつと待って！ストップ！！」

アルメが部屋の奥に「何か」を押し隠しながら大声で言った。

「アルメさ、お前ほんと子供っぽいな。なんか拾ってきたのか？虫とかか？」

俺がそう言つと、部屋の奥から誰かが出てきた。

「あ、あのー」

そう言いながら出てきた人の頭に付いてたのは、

「猫耳じゃん。」

びっくりしすぎて素で反応してしまった。それより、

「おいアルメ、これはどういうことだ？」

三匹：三人寄れば文殊の知恵（後書き）

だっはー。やっと三話までいきましたよー。最近テスト終わったんでやっと投稿できました。一話、二話と読者数が多いんで、読んで下さった方々は本当にありがとうございます。これからもがんばりますよー。

あと、感想、評価など、気軽に送ってもらってありがたいです。では四話で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7591d/>

Yesか猫かカップ麺

2010年10月28日07時59分発行